



# 見沼小だより

令和4年度 第7号

令和4年10月31日発行

TEL 048-663-7342

<https://minuma-e.saitama-city.ed.jp/>

めざす児童像 世界と向き合い、ゆめをもち、発信力のある子

## 若田光一さんと「はやぶさ2」

校長 佐藤 俊夫

10月下旬から急に寒くなり、体調管理により留意しなければならない季節となりました。運動会では、多くの皆様のご声援を頂き、またアンケートにて励ましのお言葉をたくさんいただき感謝申し上げます。

若田光一さんと1学期の終業式の日、お話をする機会がありました。宇宙フライト前の最後の日本帰国のタイミングでした。以前からフライト前にお会いできればと言っていたのですが、コロナ禍のため、オンラインで、ということになりました。その中で「5回目の宇宙飛行。日本人として誇りに感じている」という旨を伝えると、「アメリカやロシアには6回も7回も宇宙に行っている人がいる」「日本人の存在感を示すためにもまだまだ頑張らねば」「今後、ISSから月探査や火星探査の時代になる。宇宙を舞台とした仕事が増えていくことは確実で、日本人も実現可能な時代になった」「自分の姿を見て興味をもってもらい、共に宇宙に係る仕事についてくれる子が出てくれることを願っている」と、いつもながら夢が膨らむワクワクしたお話をたくさん聞くことができました。

また、先日はJAXAの津田雄一さんの講演を拝聴する機会がありました。津田さんは10年前の初代小惑星探査機「はやぶさ」でチームの一員として多くのトラブルを切り抜けてきた経験を買われ、その次の「はやぶさ2」で600人のチームをまとめるプロジェクトマネージャーに任命された方です。小惑星「リュウグウ」からのサンプルに、生命の元となるアミノ酸や液体の水が含まれていたという報道がなされたばかりですので、ご存知の方も多と思います。津田さんは子どもの頃、父親の転勤で米国に居住し、NASAケネディースペースセンターをはじめ多くの宇宙施設に連れて行ってもらい、ロケットや人工衛星に興味をもつようになったそうです。子どもの頃から自転車にウインカー（方向指示灯）を自作して付けるなど工作が好きで、志望大学を決める際には、どうせなら一番すごい乗り物であるロケットに係る勉強をしようと思い、航空宇宙工学のある大学を志望したそうです。話の中で特に印象的だったのは、「はやぶさ2」で夢がかないましたね、と言われることが多いのだそうですが、津田さんは「夢がかなった」という感覚ではないそうです。それよりは、「小さな興味を育てていったら、夢のようなことができた!」というのが近いそうです。「なるほど」と、思いました。私たち教育者は、そういった小さな興味を様々な分野で提供できる環境をつくっていくことが大切だと改めて思いました。そして津田さんは最後に、「大切だったのは『好奇心』と『縁』です」とまとめ、人との「出会い」の大切さについて語ってくれました。

私自身がこれまで、若田さんをはじめとして多くの『縁』で宇宙飛行士や宇宙関連の研究者、技術者、アマチュアの方々と出会い、様々な経験をさせていただきました。今はそのエッセンスを『縁』のある子どもたちに少しでも伝えていければ、と思っています。

若田さんの打ち上げ直前、NASAから1通の英文のメールが届きました。「ISS滞在中にKoichi Wakataとプライベートのメールが出来るリストに選ばれた」という内容でした。10月24日に卒業記念として行った「宇宙授業」でそのことを6年生に伝えました。宇宙飛行士は宇宙にいる間、多くのストレスを抱えています。それを解消するために、地球とつながっていること、孤独ではないことを実感してもらうためのNASAの心理ケアプログラムがあり、その一環として交信イベントやプライベートメールのシステムがあることを紹介しました。そこで、「校長先生と縁あって出会ったことを利用していいから、宇宙にいる若田さんに君たちができることはないかな?」というちょっと難しめの課題を出してみました。さて、子どもたちからどんなアイデアが返ってくるか……。楽しみです。